

豊かさがもたらす 少子化

日本を含むほぼ全ての先進国では少子化が進んでいますが、中でも日本では世界に類を見ないスピードで少子化が進んでいます。少子化の進展は社会に様々な影響をもたらします。将来懸念される年金財源の不足、労働力の減少、消費財市場の縮小とそれに伴う日本からの多くの企業の撤退、これらは数ある問題の内のごく一部に過ぎません。また、少子化はそれが発生するメカニズムがとても複雑です。先進国における教育費用の高騰、賃金の上昇に伴う子育てをすることで失う時間の価値の上昇、消費財の多様化による結婚の相対的価値の低下、こ



山本 和博

Yamamoto Kazuhiro

[研究テーマ]
空間経済学



れらもまた、少子化の原因のごく一部です。本稿は少子化の原因の中でも、「豊かな消費生活」にその原因を求め、そのメカニズムを検討してみます。

「豊かな消費生活」は様々な種類の財を消費できることになることによってもたらされました。20 世紀から 21 世紀を通じて、経済成長によって、人々が消費できる財の種類は、大きく増えました。1975 年生まれの筆者が子供の頃、パソコンは一般的な家庭では殆ど見ませんでした。もちろん、インターネットも電子メールも使われておらず、新聞や雑誌、そしてテレビで社会の情報を収集し、離れた人と連絡を取り合う手段は電話と手紙が中心でした。Windows 95 の開発と普及により、インターネットと電子メールが普及し、情報収集の手段がインターネットに、連絡を取り合う手段の中心は電子メールになりました。ビデオの普及も進んでおらず、携帯電話が一般的に使われるようになったのは、20 歳を越えてからであり、iPhone が登場してスマートフォンを使えるようになったのは 30 歳を越えてからです。スマートフォンの登場は、手軽に移動しながら携帯できる電話が増えただけではなく、様々な機能を消費することを可能にしました。スマートフォンによってどこでも手軽にゲームが出来ますし、動画を見ることも出来ます。手軽に持ち運べる正確な地図にもなりますし、わからないことを検索もできます。これら全てが消費財であると考え、スマートフォンの登場は多くの消費財を生み出したことになります。



わずか 40 年余りの間に、これまではこの世に存在しなかった多くの消費財が登場してきたのです。このように、今まではなかった製品がこの世に登場するのは技術の進歩によるものであり、技術の進歩こそが経済成長の原動力になってきました。エジソンは蓄音機や電灯を発明して人々の消費財の種類を増やしました。これと同じように、スティーブ・ジョブズは iPhone を生み出すことにより、人々の消費財の種類を大きく増やしたのです。本稿では、消費できる財の種類が増えることによって、人々の行動、特に子供の数を決める行動がどのように変化するかについて、考えてみましょう。

おこづかいとして 5000 円のお金を持っているとします。お金の持ち主は、昼食を食べることと、趣味に使う資金を 5000 円で賄っています。学校の近くに昼食を提供するレストランの数が増えた場合、どのように行動が変化するのでしょうか。一般的には、昼食の選択肢が増えることになります。昼食の選択肢がおにぎりとサンドイッチしかない状態から、カップラーメン、たこ焼きが選択肢に加わると、昼食の楽しみが増えることでしょう。すると、この人は趣味に割いていた予算を減らして、昼食に使う予算にまわすことでしょう。なぜこのような行動の変化が起きるのかというと、昼食に使うお金の価値が上がったからです。毎日 500 円を昼食に使っていても、選択肢が増えると、500 円から感じることでできる満足感が増えるのです。人々は、高い満足感が得られる活動には、多くの予算を割くようになります。この

場合は、趣味と比較して、昼食から感じ取れる満足感が上がったので、昼食に割く予算が増えたのです。

一般的に、消費できる財の種類が増えると、財の消費から得られる満足感が高くなります。したがって、人々はより多くの予算を財の消費に回すようになります。このことを頭に入れた上で、経済成長が進むと、子供の数がどのように変化するかを考えてみましょう。

考えなくてはいけないのは、以下のような状況です。人々が持っているものは一定の時間です。例えば、1日なら24時間の時間があります。この時間の振り分け方を考えます。会社に出勤し、働くことに使うと賃金がもらえ、所得が増えます。所得が増えると消費活動を楽しめるようになります。人々は、自分が持つ子供の数も決めます。子供を持つと、そのことから喜びを得ることが出来ます。しかし、子育てには時間がかかります。子供の数が増えれば増えるほど、多くの時間を子育てに費やさなくてはなりません。すると、犠牲になるのは、働く時間です。働く時間が短くなると、手にする賃金の額が減ります。その結果、消費活動から得られる満足感が犠牲になるのです。つまり、人々は子供を持つことからの喜びと、消費活動から得られる満足感を天秤にかけているのです。

この世界で経済成長が起こると、人々が消費可能な財の種類が増えます。経済成長が進んでも、子供を持つことから得られる喜びが変化するようには思えません。一方、経済成長の結果、消費できる財の種類が大幅に増え



たら消費活動から得られる満足感は大きく上昇します。すると、人々は、より多くの消費活動を楽しむために、より長い時間働こうと考えるようになります。なぜなら、子供を持つことから得られる喜びは経済成長によって変化していないのにも関わらず、たくさんの種類の消費財を楽しめるようになった結果、お金から得られる満足感が増えたからです。

経済成長の過程で多くの種類の製品やサービスが開発され、消費することが出来る財の種類が増えると、手にすることのできるお金の価値が上がります。すると、人々はより多くのお金を手にするために、より長い労働時間を求めるようになり、育てることのできる子供の数は減るのです。

20 世紀の半ば以降、日本を含めた全ての先進国では急速な少子化が進んでいます。その原因の一つは、我々が楽しんでいる「豊かな消費生活」にあるのです。